

# 巻 頭 言

学校長 田 浦 武 雄

附属中・高等学校紀要も、号を重ねて第18集となった。本号には、附属学校各教官の共同研究や個人研究の成果が収められている。

本年度も、本校は中等教育の本質を求めつつ、その改善のための研究にとりくんできたが、研究の重点としては、つぎの3つがあげられうる。それは、①新教育課程の問題、②生徒指導の問題、③教育工学の問題である。これらは、その大綱において、前年度の研究問題の継続であるが、以下順をおって、私なりに問題の重点についてふれてみよう。

(1)新教育課程の検討 こんにちの時代は、情報化社会、知識爆発の時代といわれているように、知識の体系は複雑化している。また学問水準の上昇は、教育内容を下の学校におしよせる動きとして現象化してくる。かつて大学の教養部で教えられていたことが、高校の教育内容にはいつてくるものがあり、高校の教育内容が中学へおりてくるものがでてきた。学ぶべきものは多く、学ぶ時間は限りがあるので、知識の精選、すなわち教材の構造化が必要となってくる。また、教育内容のレベル・アップは、当然それらについていけない生徒たちがでてくるので、教えかたの工夫が必要になってくる。その教えかたも、教材に適應して考えられねばならない。戦後の教育界をにぎわした問題解決学習か系統学習か、発見学習かアルゴリズム学習かといったように二者択一的な教育方法論の発想では、とうていこんにちの教育に対処していくことはできず、学習指導の最適化が重視されてきている。教材に応じて、どのような教育方法が最も適しているかの探求が、こんにちの教育の急務である。

他方本年度、本校で論議の対象になったものに、全員クラブ制の問題がある。教師と生徒、生徒と生徒との人間的ふれあいをたかめ、余暇のすごしかたを訓練するという点で、その趣旨は、たいせつにはちがいないが、全員クラブ制を採用した場合の施設・設備面の保障、とくに運動場の整備充実をどうするかが、緊要な問題となった。しかし問題は設備面だけではなく、人的な側面、指導者の充実が必要であり、この面の条件整備ができなければ、その効果をあげることは困難となる。

中・高校の教育課程の改善は、専門学者と現場教員との協力を必須とするが、この面で本校もいっそうの

努力をはらう必要がある。教育の論理からすると、教育行政当局による「学習指導要領」の法的拘束性の発想は、学問の発展と社会の問題との対応という点からしてますます弾力性を要求する教育課程の特性にかんがみ、その改善にとって、プラスの働きをすることは考えにくいし、また大学入試制度の改善なしには、高校の教育課程の改善もおこなにくい面があるが、脚下照顧、手ぢかなところから改善できるものは改善していく努力が必要であることはいままでもない。

(2)生徒指導の問題 本校でも、教育の現場として免れない種々の生徒指導上の問題にぶつかることが多い。生徒のなかに他への責任転嫁の態度、自己の即物的欲求を絶対視する傾向のちねしたちがいる。この傾向は増大こそすれ、減少することはなきそうである。この傾向は、生徒会の活動や運動にもみられる。よい意味での指導性を発揮するものがすくなくなったのではないか。高校がいくら大衆化したとはいえ、高校生活にとってのきめては、学習意欲である。どうしても勉強しなければならないという覚悟が乏しいものによって、生徒会が方向づけられるなら、生徒会の危機だけでなく、その余波は、学校の士気にも影響してくる。学力でも模範であり、よき指導性を発揮する人が増えるように対処する必要がある。

(3)教育工学の問題 過去三年間に、教育学部教育学科教官の総合研究「教育機器の導入による教育システム化の研究」が、文部省の科学研究費補助金の支持をえておこなわれ、それにともなって教育機器が附属に導入されたので、附属のこの方面の設備はいっそうの充実をみるようになった。これらの教育機器を活用して、どのような教育システムをつくりあげることができるかの研究に、本校でも努力する必要がある。本年度はまだその研究が緒につきかけたという段階であるといつてよいが、学部の関係教官と本校の関係教官の協力を緊密にして、その研究成果をあげていくことが期待される。本年度は、以上の諸問題の他、学校行事や公害教育に関する研究グループの研究もおこなわれてきたが、前年度に続いて、各教科での共同研究もその成果を発表し、今後の発展の道標とすることになった。

私自身としては、校長になってから、私の教育哲学研究の関心と、附属の研究との調整に苦心してきた。

私の「創造性教育の研究」と附属の研究とをできれば  
かみあわせようとしたが、時期尚早の感もあるので、  
この構想を縮小し、教育人間学の研究の一環としての  
「青年期の価値意識の研究」を一つの焦点において、  
やれるだけのことをやろうと考えている。この研究で  
は、学部の発達心理学研究室と協力できるので、研究  
の成果をあげることができると期待している。

中等教育と関連して考えてきたことの一つの鍵概念  
として、「創造的出会い」をあげよう。「創造的出会  
い」という語を、教育方法の原理としてとくに注目し  
たものには、ミシガン大学教授マシアラスとゼビンの  
共著『教室における創造的出会い』（1967年）があ  
る。たまたまこの書の翻訳を、47年夏に私は行なっ  
たが、訳書は48年4月に刊行されることになっている。  
この書がアメリカや西ドイツと同じく、日本でも教育  
書のベストセラーになるかは予想できないが、この書  
が主張する教材との創造的出会いは、中等教育でも重  
要な視点であることはたしかである。この書の一つの  
きっかけに、私は「創造的出会い」という概念につい  
て考えてきた。もともとこの書は、「発見による指導  
と学習」という副題を掲げているように、J. S. ブル  
ナー（現在オックスフォード大学教授）の主張する発  
見法、いわゆる発見学習の追跡研究の報告書であり、  
マシアラスは、発見学習と創造的出会いを概念的にほ  
ぼ同一視している。かれのいう創造的出会いは、学  
習者が教材の構造を探究する主体的技能と態度との育  
成を意味したものとみてよい。「創造的」とは、この  
場合、自主的・建設的・生産的な技能と態度との総合  
概念といってよい。他方、この書では、「探求中心の  
教師」のありかたが注目され、学習者の探求力を育て  
るうえでの教師の役割が重視されている。かれは、ブ  
ルナー以上に、価値と感情との要素を教育において  
重視すべきであるとし、価値の問題をとりあつかうさ  
いには、T. ブラメルド（ボストン大学名誉教授）の  
いう支持的傾向性的の方法と類似した主張がみられる。  
支持的傾向性というのは、とくに価値の問題をとりあ  
げる場合の教育方法の原理であり、教えるべきものは  
教えるが、学習者の批判と吟味とを保障したやりかた  
で、独断的教えこみと無目的な教育との中間の途を採  
るものである。

しかし私の見解では、「創造的出会い」は、教材に  
対してだけでなく、教師と生徒、生徒と生徒との人間  
関係においても重要である。「出会い *Begegnung*」  
という概念を、哲学思想の世界で最初に重視したの  
は、イスラエルの哲学者マルチン・ブーバーであっ  
た。かれは、1923年の著書『われとなんじ』で、われ  
となんじという人格的呼応関係の重要性を強調し、あ  
わせて現代社会では、「われとそれ」という関係、す

なわれ他者を自己の欲求達成の手段視する関係におち  
いりやすいことを警告した。ブーバーが『われとなん  
じ』を著してから、ちょうど50年が経過した。いっ  
そう複雑化したこんにちの社会も、人間関係や社会関係  
において、創造的出会いを重視すべき必要性を提起  
しているように思われる。そのことは、こんにちの社  
会が、マスソサエティ（大衆社会）と、情報化社会と  
の特色をもっている点に着目すれば、当然考えられる  
べきことである。大衆社会は、人間をマスの中に没入  
させ、個を喪失させる傾向をもっている。このような  
社会の克服は、自己の即物的欲求の充足を原理とする  
利己主義によっては不可能であり、またエリッヒ・フ  
ロムのいう「自由からの逃走」や特定派閥の指導者に  
従属することによっても不可能である。また情報化社  
会の動きは、情報処理能力と情報選択能力の育成を、  
教育に要求してくる。これらの能力は、コンピュータ  
ーや教育機器の操作に強くなることを単純に意味する  
のではなく、自己の人格的な成長を一貫して追求する  
力を意味し、価値と実存との側面に関わっている。

いずれにしても、飛躍的に変転する文明と人間の個  
としての接触の場として、人間存在の現実をとらえ、  
よりよい理想への実存的志向を重視する視点から、教  
育の過程を最適化することが重要である。このような  
教育のダイナミズムの把握は、これまでの教育理論の  
盲点であったが、その理論的構築は、ようやく始ま  
ったといってよい。私なりのこの方面の研究の成果は、  
『実存と教育』（1971年）にも発表した。実存的志向  
という概念は、よりよい人間存在をめざして、現実の  
人間存在を克服していく過程を教育過程として重視し  
た概念である。これは教育における社会還元主義の発  
想と在来の実存主義的発想との欠陥を克服することを  
めざしたものである。

創造的出会いの場として、学校の学習環境を整え  
るかどうかに、こんにちの学校の大きな課題があり、  
附属学校が、そのよき先駆的モデルとなりうるところ  
に、附属学校の一つの重要な存在理由がある。これに  
ブレーキをかける力にわれわれは適切に対処しなければ  
ならない。